



(特活)CODE海外災害援助市民センター発行  
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
TEL:078-578-7744 FAX:078-574-0702  
e-mail: info@code-jp.org URL http://www.code-jp.org/  
郵便振替:00930-0-330579

◆今号の内容◆

- ・ 2010年度基本方針
- ・ 2009年度の主な事業報告
- ・ 2010年度の主な事業計画
- ・ 総会開催のご報告

## 2010年度基本方針

2010年1月17日、阪神・淡路大震災から15年という一つの節目を越えた。思えば、1995年12月、私たちNGOは市民とともに「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を立ち上げ、これからの被災地KOBEの再建について議論し、多様な表現を持って発信した。そして10年目の同フォーラムでは、①もう一つの働き方を追求しよう ②最後の一人までを救おう ③震災を語り継ごうと、3つのことを確認した。

こうして私たち被災地の市民は、ともに寄り添い、支えあい、いのちがけで「いのちの尊さ」を体感してきた。政権交代半年を経た鳩山由紀夫前首相は2月初めに開かれた国会冒頭での施政方針演説で、「いのちを守る」「どんな場合でも孤立させてはいけない」「新しい公共」などの言葉を繰り返したが、これらの言葉はすでに私たちが15年間にわたって実践を重ねてきた言葉そのものである。いまようやく、この国の最高責任者が口にするまでに至った道のりの長さ、かみしめたい。

しかし、自然は容赦なく私たちに厳しい試練を与え続けている。2008年に遡るとミャンマーサイクロン「ナルギス」、中国四川省地震、2010年に入って間もなく、災害史上最大規模の被害かと心配したハイチ地震、さらに2月末にはM8.8という大規模な地震がチリを襲い、4月にはまたもや中国青海省地震と、ほんとに地球の軸が動いたかのような災害が相次いでいる。

他方、貧困や失業がその一因ともなっている自殺者が、毎年3万人を超えるという深刻な事態をまねくほどの社会的災害も後を絶たない。さらには、この豊かなはずの日本で日常茶飯事のごとく、子どもや女性、高齢者、障害者に対する「虐待」が起こっており、国際社会をリードするこの国の現実だとは思えないほどである。

ところで、先述したフォーラムの1年目の「神戸宣言」では、次のように宣言した。

「被災地の私たちは、自ら『語り出す』『学ぶ』『つながる』『つくる』『決める』行動を重ね、新しい社会システムを創造し

ていく力を養っていくことから、私たち自身の復興の道を踏み出していくことを、強く呼びかける」

つまり、この15年間とは、この新しい市民社会を創造する力を養うことに費やしてきたとも言える。前段で厳しい現実に触れてきたが、さまざまな分野でやっと新しい市民社会の手応えを感じるようになり、かすかな希望の光を私たちに浴びさせてくれるようにもなった。

私たちはこの15年間、支えあう社会をめざして、まず目の前の一人ひとりに寄り添うことを優先して活動してきた。その中では、支える側と支えられる側の関係について、まだ十分に議論を深めてきたとはいえない。今こそ、何としても「支えあい」の構造をより深く解明し、その道筋を見いだし、「支えあいのしくみ」を具現化していきたい。これは、「人間の安全保障」でいうところの「保護とエンパワーメント」を具現化することでもある。

いま、災害史上最大の被害に襲われた300万人のハイチ地震の被災者は、これ以上ないだろうと思われる過酷な現実を与えられた中で、しかしそこからゆっくりと、しかも確実に、勇気と誇りを持って立ち上がろうとしている。

私たちはこのハイチから発信されている力強いメッセージを受け止め、連帯することによって、私たちの足下の社会を変えることに勇気が湧き上がってくるように感じる。いまあらためて、「支えあい」には「おたがいさま」という言葉がついていることを想起したい。

事務局長:村井雅清

## 2009年度の主な事業報告 (2010年度総会資料から抜粋、要約)

### <災害救援プロジェクト>

#### ◆アフガニスタン救援プロジェクト

【2002年7月17日からの継続事業】



▲ぶどうの成長を見守る農家

2003年6月、288世帯への支援から始まった「ぶどう基金」は、返済された融資の循環により少しずつ利用者を増やし、2010年4月時点で合計480世帯となりました。

この基金は地元の評議会「シューラ」によって運営されており、農家は借りたお金を活用してぶどう畑を再生しています。「ぶどう基金」は引き続き支援者を募集しています。

さて、2009年夏、JICA草の根技術協力事業（地域提案型）として、最終年度となる3年目の農業技術研修が行われました。アフガニスタンから来日された研修生6名は、山梨県と兵庫県でぶどうの有機栽培のための剪定方法や、棚式での栽培、水の問題を解決するための点滴栽培、病気の解決法などを学びました。

最終年次には、今後のための「10年計画」を作成するワークショップも行いました。研修生は、3年目、6年目と段階を追った目標を設定し、10年後には具体的な成果を見据えました。そして何より、その計画が実現するための大前提となる「アフガニスタンの平和」を改めて強く願いました。

地元の皆さま、支援いただいている皆さまのご協力により、3年にわたった同事業は終了しましたが、帰国した研修生は今後も地元の農家に技術を伝え続けていきます。既に現地では、日本で学んだ棚式栽培や、地面に草を敷いて乾燥を防ぐ手法などが普及しているようです。今年もぶどう栽培が始まったというレポートが5月に届きました。

なお、たいへん悲しいお知らせですが、研修生の1人であった、モハンマド・アズィームさんが2010年6月、交通事故で亡くなられたとの連絡を受けました。心よりご冥福をお祈り致します。

#### ◆イラン南東部地震救援プロジェクト

【2003年12月26日からの継続事業】

CODEの支援で建設されたコミュニティセンターは、現地の被災者主体の運営・管理に移行しました。被災者の女性たちの活躍により、同センターは順調に運営されています。

#### ◆ジャワ島中部地震救援プロジェクト

【2006年5月27日からの継続事業】

2006年にインドネシア・中部ジャワ地震の被害を受けた、ジャワ島中部の中心都市であるジョグジャカルタ市から約40km離れたジリセカール村落のナワンガン村。この地域は、震災以前から水不

足に悩まされていました。行政も送水管の敷設を進めてきましたが、ナワンガン村はその送水管から1km離れていました。枝管を敷設するにも費用は高額であるため、水不足となる乾季には、村の人々は民間業者から高い水を買ひ、それが家計を圧迫していました。そこで2008年、第一段階としてCODEが枝管の敷設を支援し、村の人は乾季でも日常生活に必要な最低限の水が安価で買えるようになりました。

今後、これを「呼び水」として、地震前から立ちはだかっている地域の貧困と水問題の解決につなげていくことを目指しています。つまり、アフガニスタンに続き、被災者の復興支援から、持続可能な暮らしを支援するプロジェクトとして位置付けています。JICAの草の根技術協力事業（草の根支援型）への応募に向けての打合せ・調査も進めています。

既に、CODEの支援で弾みがついたナワンガン村では、少しずつ資金をプールして、生計向上のためのマイクロクレジット（小規模融資）システムが始められました。若者を中心に、ナマズの養殖事業、唐辛子の栽培などにチャレンジしたり、試験的に山羊の飼育も始めるなど、地域経済の自立に向けた活動を開始しています。

#### ◆バングラデシュ

##### サイクロン「シドル」救援プロジェクト

【2007年11月20日から2010年5月まで】

2007年11月15日にバングラデシュで発生したサイクロン「シドル」に対してCODEは、以前から交流のあるバングラデシュ防災センター（BDPC）所長のサイデュール・ラーマン氏の提案を受け、壊れた孤児院の再建を支援しました。この孤児院は、もともと村の人々の寄付によって建てられたもので、公立ではないため、政府から再建のための支援を受けられずにいたのです。

建設作業はBDPCの協力のもと、村の人々が主体となって進められました。村人が組織する建設委員会とアドバイザリー委員会によって、資材の調達から会計まで全ての管理が行われました。また、CODEからの資金に加えて村人自身が寄付を集めたり、ボランティアで建設作業に協力したりしました。このようにして作られた孤児院は、決して単に外から与えられたものではなく、「私たちの作ったものだ」「レンガひとつひとつにも愛が詰まっているんだ」という村人の自信となりました。資財調達の段階から質にもこだわって造られ、サイクロンシェルターとしても活用できることから、「安全のシンボル」としても村の力になっています。

2010年5月、建物の完成をもって、本プロジェクトは終了しました。孤児院には地元の人々が食事を提供するなど、引き続きボランティアな活動によって運営が支えられています。



▲できあがった孤児院の中で

## ◆ミャンマー(ビルマ)・

### サイクロン「ナルギス」救援プロジェクト

【2008年5月7日から2010年1月まで】



▲救援物資を配布している様子

サイクロン「ナルギス」の被害は、国際社会への発信の遅れと、ミャンマー軍事政権の他国からの支援を拒んで来たため甚大な被害となりました。CODEは、正会員で

ある鶴飼卓医師が理事長を務める「HuMA(災害人道医療支援会)」を通してエラワディ管区モラミヤインジャン地区での井戸掘りプロジェクトを支援し、合計8基の井戸が掘られました。井戸ができたことで同被災地の住民は、遺体や農薬の流れ込んだ川の水を利用せずにすむようになり、大変喜んで下さったという報告を受けました。

また、その後も、サイクロン発生から1年以上が経過したにもかかわらず、食糧不足で飢餓状態を招いていたことから、ミャンマーに詳しいCODEスタッフTさんの提案で、被災地域に対する緊急食糧支援を呼びかけました。現地カウンターパートのNGO「メッタ」を通して9月、ピンサール地区の3241人に20日分の米を配りました。また、2010年1月にもピャーポン地区の380人に24日分の米を配り、この災害に対するプロジェクトは終了しました。

## ◆イタリア地震救援プロジェクト

【2009年4月7日からの継続事業】

4月6日に発生した地震に対し、JALの協力によってスタッフ尾澤良平を被災地に派遣しました(4月23日～30日)。尾澤は被災者に対する心のケアの1つとして、日本ですでに定着しつつある「ドクター・クラウン」(道化師治療。ピエロに扮して笑いや楽しみを与え、安心感を持ってもらうというもの)を実践しました。帰国後、報告会を開催し、さらなる支援を呼びかけたところ、関西在住のイタリアバロック音楽の音楽家の方々が「チャリティコンサート」を開催して下さいました。また、CODE会議室でも「チャリティアート展」を開催し、収益金はイタリア支援として寄付されました。

一方、尾澤は帰国後も「ドクター・クラウン」のボランティアについて学んでおり、もう一度これを活かさないかと検討しています。また、もう1つの候補として、障がい者団体への支援の可能性も追求しています。

## ◆ハイチ地震救援プロジェクト

【2010年1月12日からの継続事業】

ハイチ地震は、全人口の3分の1以上が被災するという大災害となりました。地震後、CODEはこれまで何度も協力いただいているメキシコのNGO、「メキシコ・トラテルロコ地区住民連絡会」のリーダーであるクワウテモック氏を現地に派遣しました。同氏は1月25

日～3月10日および、3月30日～5月15日、首都ポルトープランスから40kmほど離れたレオガンで活動しました。レオガンは8～9割程度の建物が倒壊するなど大きな被害が出た都市で、日本の緊急援助隊も活動を行いました。また、日本人の医師で、1976年からハイチで結核療養に貢献されているシスター須藤さんの活動拠点もレオガンです。

まずCODEは、阪神・淡路大震災を経験したKOBEからハイチにできることは、励ましのメッセージによる“寄り添い”であるとし、当時被災したラジオ関西との連携で「ハイチへメッセージを送ろうキャンペーン」を展開しました。集まったメッセージを関西在住のハイチ人Cさんに訳してもらい、クワウテモック氏がハイチのラジオ局を通じて被災者に伝えました。

また、クワウテモック氏はレオガン市内の壊れた病院、Cardinal Legerの跡地を拠点に(後にここがシスター須藤さんの病院だったことがわかりました)、他の支援団体と連携して医療キャンプの立ち上げを行いました。キャンプ開設後、クワウテモック氏は非医療スタッフとして活動の調整、キャンプ外の会合への参加などの活動を行いながら、周辺地域の被災実態の把握とプロジェクト案件の可能性を調査しました。地域の人々と密接な信頼関係を築いたクワウテモック氏は、再建のためのドナーを探しているコミュニティと、支援団体を結びつけたり、孤児院の子どもたちに寄り添って共にアクティビティを行ったりしました。



▲クワウテモック氏(右から2番目)と子どもたち

＜ネットワーク作りに関する活動＞

## ◆神戸学院大学とのコラボレーション事業

2007年度より、神戸学院大学社会貢献・防災ユニットとCODEとのコラボレーション事業として、授業企画および講師派遣を行っています。2009年度も「社会貢献論Ⅰ」の前期課程14回を担当しました。講義テーマは「CODEが担う社会貢献について」、「減災サイクルともう一つの社会」「ジェンダーと災害」、「四川大地震から学ぶ」などです。また、ポーアイ4大学連携推進センター主催の「2009地域コミュニティ入門」にて、「災害と地域」をテーマに講演しました(村井理事)。

## 2010年度の主な事業計画 (2010年度総会資料から抜粋、要約)

### ◆中国・四川大地震救援プロジェクト

【2008年5月13日から継続】

2008年5月の地震発生以来、CODEスタッフ・吉椿雅道を現地に派遣し続けてきました。当初から寄り添い続けてきた北川県光明村を含む同県香泉郷に、同郷政府と合意して(2009年4月)「総合活動センター」を建設することが決まりましたが、急遽、中国共産党がこれを建設するという方針転換となりました。CODEの息の長い寄り添い活動が奏功し、日常の医療をとおしていちを守る業務を党の責任で建設することになったのは喜ばしいことですが、当会としては本契約まで結び、設計図まで作成したあとなので、不透明感が残ります。

新たな支援内容としては、一つの案はこの総合活動センターの機能を充実させるための支援(医療機器、医薬品、放送設備など)です。またもう一つは、この総合建設センターの設計図作成にあたって耐震性を充分考慮したことから、香泉郷に耐震のモデル建築を作り、被災者にアピールできないかという案です。そのモデルハウスを高齢者のふれあいの場とすることや、「農家楽」(農村体験型ツーリズム)に利用する可能性も検討できます。

場合によっては別の被災地での案件を模索しなければなりません。これまで吉椿の努力で築いてきた光明村住民との絆を維持するためにも、この地での支援を継続することが望まれます。

今回の厳しい経験で、当会がNGOとして活動を続ける上での課題も見えてきたことから、今後により影響をもたらすことを願います。



▲村の人から聞き取りを行う吉椿(左端)

吉椿が築いてきた絆は、国と国の関係が難しくても、人と人は国境を越えてつながることを証明してきたといえます。

### ◆ハイチ地震救援プロジェクト

【2010年1月12日から継続】

「報告」で記載したように、クワウテモック氏はドナーとコミュニティをつなぐ調整役として支援活動に多大なる貢献をしました。今後も彼が現地で活動できるようサポートすることが重要だと考えています。

また、あわせて、阪神・淡路大震災およびこれまでの救援活動の経験から、耐震シェルター建設のためのワークショップや、それを職業訓練システムにまで発展させる可能性を検討しています。その際、先述のシスター須藤さんとの連携が重要になってきます。

ハイチには、「コンビット(協働)」という習慣があります。地元のコミュニティや青年ボランティアの力を最大限に引き出し、現地の

文化や生活様式を尊重した住民主体のプロジェクトを実施したいと考えています。

### ◆中国・青海省地震救援プロジェクト

【2010年4月14日から継続】

2008年の四川省地震以来連協力いただいている成都のゲストハウス「Sim's」と連絡を取って被害状況の把握に努め、日本での救援活動を立ち上げました。



▲Sim'sによる救援物資の運搬

今回の被災地は標高3700mという過酷な地形でもあり、中国人の救援隊でも高山病で倒れる方が続出するほど救援活動は困難を極めました。「Sim's」から早速救援物資を積んでトラックを1台出しましたが、途中の道路状況の劣悪さもあって片道20時間以上要するという結果になりました。今後の救援物資の提供については、被災地により近い西寧での物資の調達を検討することになりました。

なお、CODEスタッフの吉椿も6月2日から12日に青海省の被災地に入り、現地調査を行いました(うち玉樹滞在5日間)。今後CODEとしては、Sim'sと連携した最低限の救援物資提供に協力しつつ、阪神・淡路大震災以来過去47回の海外における経験を活かした支援活動が展開できるように、現地と密に連絡を取りながら実行してまいります。メディアでの報道は少なくなってきましたが、復興にはまだ長い道のりが必要です。引き続きご協力よろしくお願い致します。

## 2010年度総会が開かれました

6月19日(土)、兵庫県民会館にて2010年度総会が開催されました。正会員9名、委任状13名、オブザーバー4名で、議案である2009年度の事業報告・決算、2010年度の事業計画・予算について審議が行われ、すべて承認されました。総会報告資料をご覧になりたい場合は、ホームページをご参照いただくか、事務局までご連絡下さい。

今後ともみなさまからのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。

### <2010年度運営体制>

代表理事：芹田 健太郎 神戸大学名誉教授/愛知学院大学教授

副代表理事：室崎 益輝 関西学院大学総合政策学部教授

災害復興制度研究所所長

副代表理事：水野 雄二 (財)神戸YMCA総主事

理事：黒田 裕子 支援プログラム部会長/阪神高齢者支援ネットワーク理事長

理事：野崎 隆一 ガイドライン部会長/神戸まちづくり研究所事務局長

理事：山添 令子 市民参画部会長/コープこうべ常勤理事

理事：榛木 恵子 人材育成部会長/関西NGO協議会事務局長

理事：藤野 達也 (財)PHD協会総主事代行

理事：松本 誠 市民まちづくり研究所所長  
 理事：村上 忠孝 財務部会長・村上環境住宅研究所所長  
 理事：吉富 志津代 多言語センターFACIL代表  
 理事：藤野 一夫 神戸大学大学院国際文化学研究所教授  
 理事兼事務局長：村井 雅清 被災地NGO協働センター代表  
 監事：中川 和之 時事防災リスクマネジメントWeb編集長  
 監事：飛田 雄一 (財)神戸学生青年センター館長

ハイチ地震のパネル展示(細川)

3月9日 神戸学院大学防災・社会貢献ユニット  
ボランティア研究会で講演(村井理事)  
 3月20～21日 世界災害語り継ぎフォーラム  
(発表者：村井理事・吉椿、事務関係：細川)  
 3月24日 関西NGO協議会理事会に出席(村井理事)  
四川大地震パンダタールプロジェクト現地報告会  
(名古屋)で講演(吉椿)

## 活動記録 2010/1/1～6/12

1月9、10、11日 関学災害復興制度研究所5年フォーラム  
「阪神・淡路大震災がこの国に遺したもの～人間復興の旗は立てられたのか」  
 1月11日 「草地賢一さん召天10年記念会～蒔かれた種は今」  
 <1月12日 ハイチで地震発生>  
 1月14日 ハイチ地震支援活動開始  
 1月14日 国際防災・人道フォーラム「兵庫行動枠組み採択から5年～都市の減災に向けて」  
 1月15日 JICA海外メディア本部招聘プログラム  
 1月16日 神戸新聞社主催 阪神・淡路大震災15周年フォーラム「つながる思い、世界のために～防災・災害復興と国際協力～」パネリスト(芹田代表、齊藤容子さん)  
 1月17日 ぼたんの会1.17メモリアル・コンサート「竹下景子さん“詩の朗読と音楽のタベ”」(於神戸松方ホール)  
 1月18日 国際防災シンポジウム2010/APEC防災CEOフォーラム「都市の安全と気候リスク」  
 1月22日 楠高校で講義(村井理事)  
 1月23日～3月10日 海外研究員クワテモック氏ハイチ派遣  
 1月25日 関西NGO協議会理事会に出席(村井理事)  
 1月28日 楠高校で講義(村井理事)  
 1月28日 インドネシア「呼び水プロジェクト」について  
草の根地域技術協力事業(支援型)申請に係る意見交換会  
 1月30日～2月17日 四川地震第10次派遣(吉椿)  
 1月31日 ラジオ関西でハイチ支援のアピール(村井理事)  
 2月9日 神戸学院大ボランティア研究会参加(村井理事)  
 2月12日 全日本仏教婦人連盟新年修正会出席(村井理事)  
 2月14日 「Let'sいっちょカマー」フリーマーケット出店(細川、ボランティア)  
 2月17日 しみん基金KOBEファンドレイジング・パーティ  
 2月19日 CODE理事会  
 2月25日 「震災復興とシビルソサエティの役割  
一日中台の経験から」シンポジウムで報告(吉椿)  
JICAハイチ派遣団帰国報告会に出席(村井理事)  
 2月26日 21世紀文明シンポジウム「災害を巡る国際協力の  
仕組みづくり」でパネリスト(村井理事)  
 <2月27日 チリで地震・津波発生>  
 3月1日 チリ地震支援活動開始  
 2月28日～4月15日 四川地震第11次派遣(吉椿)  
 3月7日 コープファミリーフェスタに参加・

3月30日～5月15日 海外研究員クワテモック氏をハイチへ  
第二次派遣  
 4月8日 ハイチ支援に関し、関西NGO協議会にて  
パナソニック労連にプレゼン(村井理事)  
 4月9日 チリ地震復興支援調査報告会(JICA兵庫)に出席  
(村井理事)  
 4月12日 ハイチ支援に関しパナソニック労連にてプレゼン  
(村井理事)  
 4月13日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(村井理事)  
神戸学院大学防災・社会貢献ユニット ボランティア  
研究会に出席(村井理事)  
 <4月14日 中国青海省で地震発生>  
 4月15日 青海省地震支援活動開始  
 4月16日 CODE理事会  
 4月20日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(村井理事)  
 4月26日 JICA兵庫 国際防災研修センター関係機関連携会議  
に出席(村井理事)  
関西NGO協議会理事会に出席(村井理事)  
 4月27日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(牧秀一さん)  
 5月11日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(藤室玲治さん)  
 5月12日 JICA兵庫主催 ハイチ復興支援研究会に参加  
 5月18日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(村井理事)  
 5月24日 「インドネシア呼び水プロジェクト」JICA草の根協力支援  
型申請に関するJICA兵庫との意見交換  
 5月25日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(齊藤容子さん)  
 5月29日 関西NGO協議会総会に出席(村井理事)  
 6月1日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(村井理事)  
 6月4日 共生人道シンポジウム「国際人道支援にところが揺れ動  
いた時～中国四川大地震における心理社会的  
サポート」にコメンテーター、パネリスト出席(村井理事)  
 6月8日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義  
(村井理事)

会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)

◆一般寄付(災害救援は除く)

個人:笠置りか、吉田啓子、乗本久美子、ハヤシトル、柳福子、鈴木雅史、森和子、吉永美和、石橋有紀、藤田精三、三島宣彦、樋口充子、川東邦夫、白濱ひろみ、塩原真由美、加藤明子、藪亀二葉、土屋芳久、中村哲也、丸栄子、西畑よし子、森明子、成毛典子、滝上忠美、福澤匠、安藤尚一、大槻輝美、小牧正子、加藤清、永松由美

団体:(株)林造園、(株)サンバリア100、(有)コズミックベース、(有)トテス、めふコープ委員会、財団法人神戸YMC A、四日市・鈴鹿市英会話グループ

◆会員

・正会員

個人:浅野壽夫、鶴飼卓、村上忠孝、飛田雄一、吉富志津代、明石和成、山崎達枝

団体:財団法人神戸YMCA

・賛助会員

個人:飯塚明子、井上力、和田幹司、黒瀬晴世、中山巖、木下洋子、高橋智子、菊田歌雄、亀井加寿子、新崎広治、柴原園子、林大造、中村尚司、山崎清、安藤信宏、北茂紀、山本治子、小谷美智子、高橋智子、安藤尚一、宇城シズ子、岩崎信彦、滝上忠美、橋本青明、吉田秀夫、後藤堅吾、服部正、牧田稔、中谷勇一、田中淳子、遠周龍子、岡本芳子、杉田文夫、鈴木嶺、飛田雄一、藪口由美子、梶谷由美子、三島宣彦、北浦和志、鈴木有、今井田正、吉田あち

団体:アートサポートセンター神戸、DT & COMPANY、御津ボランティア協会

◆ボランティア募集

事務所での事務や発送作業、自宅での翻訳ボランティアなど、CODEの活動に参加してみませんか?ご興味のある方はお気軽にご連絡下さい。

◆メーリングリスト登録

被災地の救援活動のニュースやイベント情報を発信するCODEのメーリングリストにぜひご登録下さい(無料です)。ご希望の方は下記アドレスまで、「メーリングリスト登録希望」と記してメールをお送り下さい。

CODEメールアドレス:info@code-jp.org

◆A4コピー用紙の「ウラ紙」を集めています!

事務作業に何かと必要になる「紙」。リサイクルのためにも、使用後に不要となった、裏の白い紙(ウラ紙)を集めています。CODE事務所宛にご送付いただけますとたいへん助かります。ご協力よろしくお願い致します。

おわりに

今号も最後までお読みいただきありがとうございます。

さて、お越しになったことのある方はご存じだと思いますが、CODEの事務所には中庭があり、阪神大震災の被災者を慰霊する観音様が祭られています。また、多様な植物が植えられ、あるいは自生しています。プロの庭師ばりに器用なスタッフのTさんと事務局長の村井が手入れをしてくれているそこは、植物の密度が高く、丈の高いものも多いため、「秘密の花園」のようです。今日も草いきれがしています。

庭を歩くと、名前も知らない植物がたくさんあることに気がきます。虫についてもそうです。小さな頃に色々な草を使ってままとをしたり、虫を育てたりしたもの、いま都会で「現代っ子」生活をしている自分は自然との触れ合いも、手作業をする機会もほとんど持たないことに思い至ります。コンクリートに囲まれ、スイッチひとつで間に合う生活、既に出来上がったものを消費する生活です。

農業に携わっている友人が、米や野菜だけでなく味噌や漬物など色々な食べ物を手作りしようとしていることや、住民みんなで協力して土地にあるもので家を建てるという被災地の人々の話を聞くと、もっと丁寧に暮らそう、体を使って暮らそうと思うこの頃です。

なお、長年このCODEレターの作成を担当して下さっていたスタッフの福田信介さんが、2009年7月21日に永眠されました。享年36歳でした。本号が皆さまに届く頃には、事務所での一周忌法要を無事に終えていることと思います。ご冥福をお祈りするとともに、CODEを支えて下さった福田さんに改めて感謝したいと思います。(C.O)

募集情報

◆寄付のお願い

引き続き、ハイチ地震および青海省地震をはじめ、各プロジェクトへの寄付を募っています。緊急段階を過ぎ、本格的な復興を始めた被災地に、長い目で寄り添っていく必要があります。ご協力よろしくお願い致します。

◆インドネシア「呼び水基金」にご協力下さい

本号でも紹介しているインドネシア支援プロジェクト。お互いが助け合いながら村のゴールを目指していくための第一歩という意味を込めて、「呼び水基金」と名付けました。JICAの草の根技術協力事業(支援型)への応募も進めていますが、採用されるかどうかにかかわらず、アフガニスタンの「ぶどう基金」のように息の長い支援活動を行っていく予定です。

